

# IFAF Junior World Championship

U19 日本代表チーム

監督 山㟢 隆夫

# 自己紹介



1958年 大阪にて生まれる  
東豊中高校 野球部  
日本体育大学 アメリカンフットボール(WR)  
大阪産業大学付属高等学校: 1981～現在に至る  
体育教師  
ファイティング・エンジェルス ヘッドコーチ  
全国大会出場 22回  
全国大会優勝 7回  
全国大会準優勝 3回  
IAAF Junior world Championship : Head Coach  
銅メダル  
最優秀ヘッドコーチ賞  
フェアプレイ賞

# IFAF Junior World Championship in 2009

我々にとって、この大会に参加する大きなモチベーションとなっていたのは、NCAA1部校に進学が決まっているレベルの選手が揃っている、すなわち、アメリカの一流レベルの代表に挑戦できる可能性がされることであった。

我々の現在の実力を推し量る上で、またとない機会であり、どんな結果が残るにせよ、真っ向から挑むことが、今後の発展につながると考えた。

その可能性を掴むために、決勝進出が具体的な目標となった。



# 監督の役割

監督の役割は…

- ①チームの方向性を示すこと(運営、戦術、戦略すべて)
- ②ヘッドコーチ、攻守コーディネーターの指導・相談役(戦術、戦略面)
- ③最終決断

最も注力したこと…日本代表としての姿勢を選手たちに植え付ける=チームの哲学作り

- ・国を代表して戦う意味
- ・どういった心構えを持たなければならないのか
- ・どういう態度をとらなければならないのか。

日本代表チームは、国の誇りを背負ったチーム

我々が挑むのは、我々よりも身体的に強く、大きく、実際には戦ってみるまで本当の実力が分からぬ相手

未知の相手に挑むためには、一致団結して、チームワークを発揮しなければならない。

様々な価値観の中で育った選手を一つに纏めるためには、チームとしての共通の認識を持つことがとても重要。

⇒ 日本代表チームとしての共通の基準、規範を作り、それに沿った指導を行うこと

# 選手の選考

## ＜選手選考の基準＞

### 1 日本代表に相応しい態度

最優先したことは、日本代表の自覚を持って行動できる資質。

日本代表の選手は、国の名前を背負っているだけではなく、アメリカンフットボールという競技の代表でもある。

国内…日本代表選手が周囲にあたえる印象が、そのまま競技の印象となる。

国際大会…日本代表選手が周囲にあたえる印象が、日本という国の印象になる。

こうした立場を捉え、自らを律する感性を持った選手でなければ代表の名を背負う資格がないと私は考えている。



# 選手の選考

## 2 柔軟な対応力と闘争心

選手の能力という点では、柔軟な対応力を重要視した。自チームでエース格の選手であっても、日本代表チームのシステムに順応できなければ、力を発揮することはできない。新しい考え方を直ぐに理解できる賢さと、それをすぐに実行できる身体能力の両面で、対応力の高い選手を求めた。負傷者がいる可能性を踏まえて複数ポジションをこなせることを高く評価した。自分よりも大きく、パワーもある相手に精神的にひるまずに最初から全力で挑んでいける闘争心も不可欠。

## 3 スピード、機動力があることを前提としたサイズ

特に攻守ラインには、サイズが大きいことを重要視した。ただし、必要最低限のサイズは必要だが、優先順位としては、機動力を発揮できることの方が重要。スキルポジション、特にワイドレシーバーについては、スピードと捕球能力を最優先した。



# オフェンス戦略

## スプレッド攻撃を採用した理由

- 1 スプレッド攻撃を行う能力を持ったクオーターバック、レシーバーが揃ったこと
- 2 他国とのサイズ差を補うため

JWCの3試合合計…全攻撃160プレーのうち、94プレーがパス(6割)

当初、ランニングバックらを中心とした攻撃プランを考えていた。

3人のランニングバックのうち、2人は選手登録後に負傷し、残る一人もドイツ戦で負傷  
ドイツ戦終了後に大幅な変更を余儀無くされた。

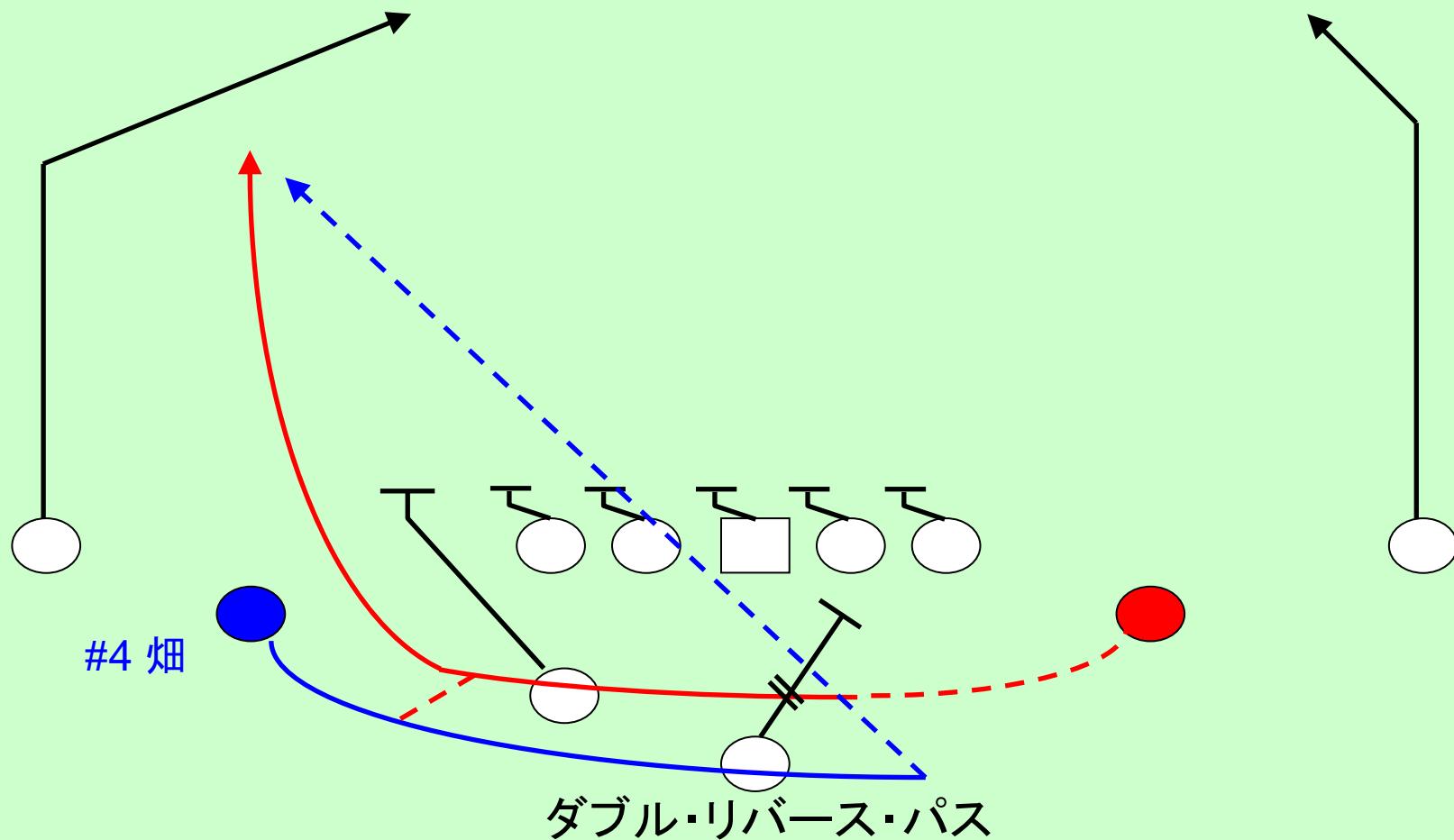
コーチにも柔軟な対応力が求められる。「選手を混乱させず、いかにシンプルにかつ必  
要な変更が行えるか」がポイント。



# スペシャル・プレイ

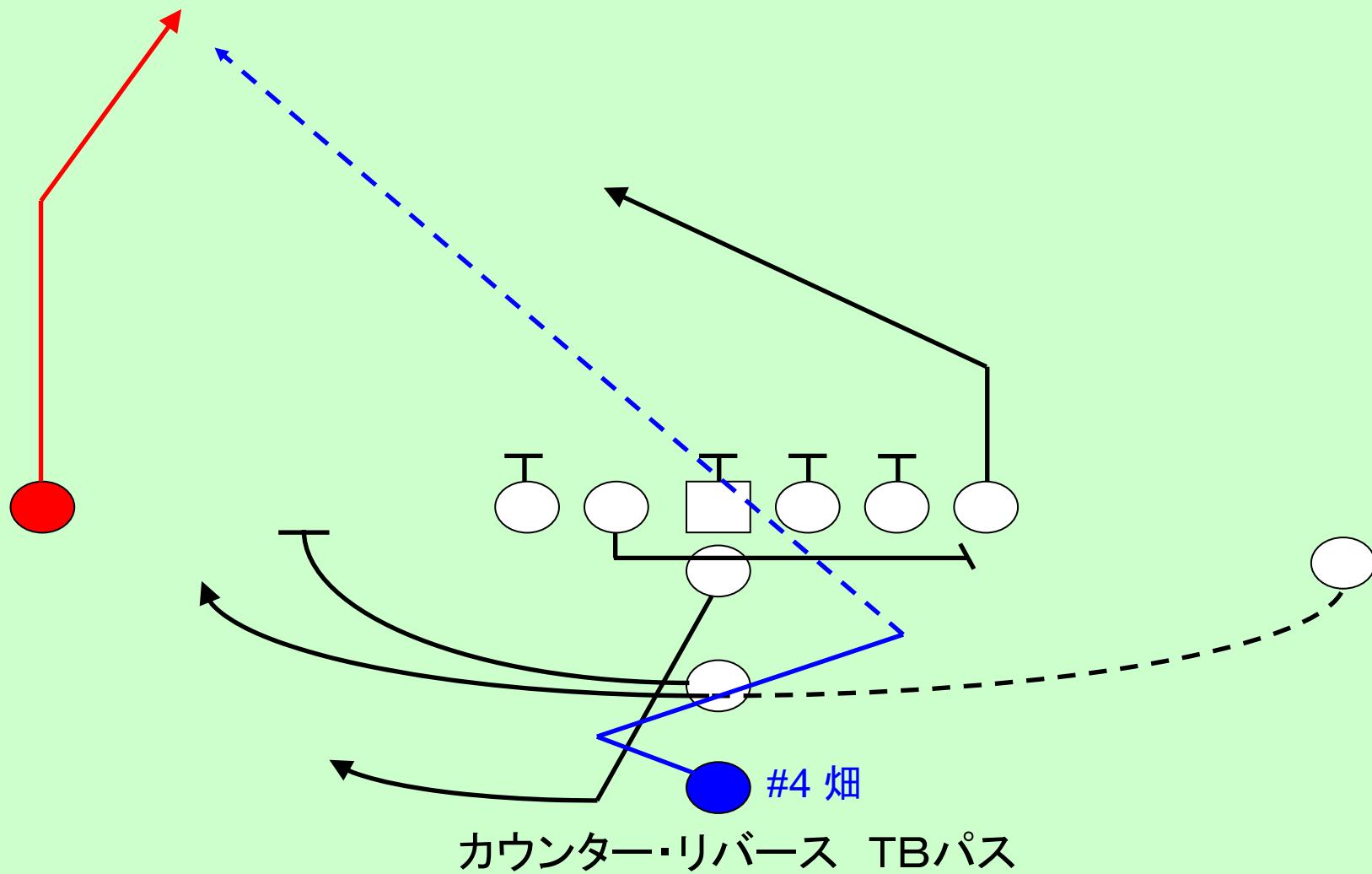
スペシャルプレー…試合のモメンタムを掴むため。我々の器用さやチームプレーの正確さを盛り込んだスペシャルプレーを準備した。

ドイツ戦…第4クオーター、3対7で迎えた逆転シリーズ、敵陣34ヤード、第2ダウン5ヤードの場面でダブルリバースからのパスを使用



# スペシャル・プレイ

カナダ戦…オープニングドライブで、プロI体型からカウンターリバースをフェイクしたTBからのパス。カナダとニュージーランドの試合のビデオを分析し、カナダ守備がランに対して反応が早いというスカウティング結果に基づいて準備した。



# スペシャル・プレイ

ドイツ戦のダブルリバースからのパスは、リバースパスを投げる選手が前半で負傷。しかもその選手しか練習をしていなかった。

カナダ戦のカウンターリバースフェイクのパスは、リバースフェイクのアクションをするレシーバーが足を負傷していたため、タイミングが遅くなってしまった。

この2つのプレーを成功させるキーパーソンになったのが、クオーターバックの畠卓志郎。畠は日本代表チームの第3クオーターバックで、練習では主にスカウト攻撃を担当。

ドイツ戦のダブルリバースからのパスを展開する時、咄嗟に畠を起用することを思いついた。畠はこのプレーを一度も練習をしたことがなかったが、スカウト攻撃で、どんなプレーでも器用にこなしていたので、彼ならばできるという確信があった。サイドラインで基本的な動作だけを教えて、フィールドに送り込み、彼は期待にしっかりと応えてくれた。

カナダ戦のスペシャルプレーの時も、リバースフェイクのタイミングが遅くなってしまったにも関わらず、しっかりと、フィールド内で対応してパスを成功させた。

畠は自らの役割を理解し、柔軟に対応して役割をまっとうした我々のチームを象徴する選手の一人だったと言つていいだろう。



# 結び

決勝に進出してアメリカ代表に挑戦をするという目標は達成できなかった。

初戦のドイツ、準決勝のカナダ、3位決定戦のメキシコはいずれも強敵だったが、その強敵を相手に挑み、銅メダルを獲得した選手たちを誇りに思っている。

フェアプレー賞をいただけたことは、チームとして最も誇らしいこと。選手たちに日本のフットボール選手を代表する品格を求めたが、フェアプレー賞は、選手たちがそれを理解し、プレーした姿を評価していただいた証である。

私自身は最優秀監督賞をいただいたが、これも、果敢に、クリーンに強豪に挑んだ選手たちのプレーがあったからこそ。私は大会最後のチームミーティングでそのことを選手に話し、選手たちに御礼を言った。



# 結び

今回の挑戦において、戦術的にはある程度通用するという感触を得た反面で、アメリカ代表の非常にシンプルで力強いフットボールを見ると、フィジカルな部分、特にスキルポジションのサイズ向上、フィジカル向上に大きな課題があることが明確になった。国際試合において、我々にとってサイズ差はこれからも不利な要素としてついてまわるので、戦術面でもより一層の工夫が必要だと感じている。

私の願いは、今回、JWCを経験した選手たちが、この経験を基に将来海外に通用する選手に成長してくれること、そして、指導者となった時に、日本のフットボールをさらに一段階上のレベルへと押し上げる存在になってくれることである。





ご清聴、ありがとうございました！

